

## タイ・バンコクにおける国家・都市の近代化実験空間に関する研究

- ラーマ6世治世期(1910-1925)を中心として -

RESEARCH ON EXPERIMENTAL SPACES FOR THE MODERNISATION OF STATE AND CITY  
IN BANGKOK, THAILAND

- During the Reign of Rama VI (1910-1925) -

玄田悠大\*<sup>1</sup>, 中島直人\*<sup>2</sup>

Yuta GENDA and Naoto NAKAJIMA

The objective of this research is to demonstrate the function of city space based on how it affected the transformation of social structure in Bangkok, Thailand, by examining modernisation projects as 'experimental spaces for modernisation' conducted during the reign of Rama VI from the viewpoint of nationalism and by spotlighting domestic and international affairs.

These spaces, demonstrating the modern national statue, were expected to prevent movements against the ideal modern state image and demonstrate the legitimacy of the political situation, and the rulers of the existing society were appropriate for governing even after modernisation was achieved.

**Keywords :** Modernisation, Urban space, Bangkok, Rama VI, Dusit Thani, The Siamese Kingdom Exhibition

近代化, 都市空間, バンコク, ラーマ6世, ドゥシットターニー, シヤム王国博覧会

## 1. はじめに

## 1. 1 研究の背景と目的

本研究の目的は、国家の社会構造変革に対する都市空間の働きを捉えることである。その為、社会構造変革の一つである近代化、特にナショナリズムに焦点をあて、近代化後発国であり非植民地であるタイの近代のうち絶対君主制下にあったラーマ6世治世期(1910-1925年)に、バンコクの都市空間の一部において社会への近代化導入のための実験を行なった事業を対象とする。その際、同事業の空間の働きを、国家内及び国家間の関係性の視点から明らかにする。

アジアでは19世紀頃より西洋列国の進出を受け徐々に国家体制や都市空間等の近代化が進んだ。その中でもタイと日本は近代化を進めつつ植民地にならずに独立を保った国家である。近代化への都市空間の働きを論じるに先立ち、これら近代化及び植民地の観点を整理する。

まず近代化について整理する。社会学を専門とする富永健一は近代化を体系化しつつ多面的に捉えた著書『近代化の理論』<sup>1)</sup>で「近代化(modernization)とは字義的には近代的(modern)になることを意味」<sup>2)</sup>とし、近代化という概念は、技術と経済の近代化、政治の近代化、社会の近代化、文化の近代化の四領域からなっていると述べる<sup>3)</sup>。うち、政治の近代化は「近代国民国家を形成すること、そして王の専制支配から離脱して民主主義を実現すること」<sup>4)</sup>とし

ている。国民国家形成を目指す運動はナショナリズムであることを踏まえると、政治の近代化過程はナショナリズムに関係すると言える。この観点から本稿では、ナショナリズムに着目する。

次に、ナショナリズムの整理を、国の内部の関係と他国との関係に分けて行う。国家内の関係性の整理に際し、ナショナリズム研究を代表する文献である『定本想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』<sup>5)</sup>で著者ベネディクトアンダーソンは、支配者と民衆という国家内の関係からナショナリズムを分析している。アンダーソンは、「植民地国家がその支配領域を想像するその仕方—その支配下にある人間たちがだれであるかという性格付け、その領域の地理、その系譜の正統性—を根本的にかたち作った」<sup>6)</sup>ことにおける権力の三つの制度として、「人口調査、地図、博物館」<sup>7)</sup>を挙げ、「人口調査、地図、博物館は、こうして、相互に関連することにより、後期植民地国家がその領域について考える、その考え方を照らし出す」<sup>8)</sup>と述べている。なお本稿では、人口調査はその調査領域の国民全員を必ずどこかの範疇に分類する制度、地図はその国家の主権領域を明確に国境で示す制度、博物館は考古学を基とする一連の遺跡の復元・一般化作業によって支配する領域・権力の系譜や正当性を示す制度<sup>9)</sup>と整理する。

アンダーソンは前述のタイについて「彼<sup>10)</sup>の主たるモデルは、連合王国やドイツではなく、オランダ領東インド、英領マラヤ、イン

\*<sup>1</sup> 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程・修士(工学)/国際交流基金

\*<sup>2</sup> 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 准教授・博士(工学)

Grad. Student, Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, M.Eng. / The Japan Foundation  
Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr.Eng.

ド帝国などの植民地官僚国家であった。こうしたモデルに従うということは、王国政府を合理化、中央集権化し、伝統的な半独立の属国をなくし、やや植民地風に経済開発を推進するということを意味した<sup>119</sup>、「シヤムは植民地化されなかった。しかし、最終的にその国境となったものは植民地的に決定された。」<sup>120</sup>、「タイの指導者が国境を地図の上の連続的な線、つまり地上にあるなにか目に見えるものに対応するのではなく、他の主権国家のあいだにはさまれた排他的な主権国家を区切る線分、と考えるようになったのは一八七〇年代のことであった」<sup>121</sup>と言及している。つまり、タイは、植民地国家をモデルとし、植民地国家の影響を受けて国家が形作られていったとまとめる。その上で、国家内の統治において、植民地国家と同様、「人工調査、地図、博物館」の三つの概念の適応を示唆しているに留まっているため、それには更なる検証が必要である。

他方、支配者と支配下にある人間たちとの関係性に着目する際、アンダーソンは、タイではラーマ6世によって公定ナショナリズムが実施されたと述べている<sup>122</sup>。公定ナショナリズムとはシートンワトソンにより提唱された概念であるが、アンダーソンは「公定ナショナリズム——国民と王朝帝国の意図的合意——」<sup>123</sup>および「共同体が国民的に想像されるにしたがって、その周辺においやられるか、そこから排除されるかの脅威に直面した支配集団が、予防措置として採用する戦略」<sup>124</sup>とする。これらより本稿では公定ナショナリズムを支配者側により定められたナショナリズムと解釈する。その上で、タイのラーマ6世治世期の公定ナショナリズムの分析が、国家内の観点による、都市空間とナショナリズムの関係の分析に利すると考える。

次に近代化の国家間での関係性を整理する。富永は著書『近代化の理論』<sup>125</sup>で「後発国というのは、そのような社会変動の担い手が内部から自生しなかったために内在的発展がおこらず、社会停滞がつづいてしまった社会であると考えられます。そしてそのような国では社会停滞がつづいているうちに、すでに近代化と産業化を達成した諸国から産業文明が伝播してきて、それら先発諸国からの強い影響のもとに、内部的な成熟がととのわないうちに、「上からの」近代化と産業化に着手せざるを得ない、ということになるのです」<sup>126</sup>と論じている。本稿では、「上からの」近代化とは支配者や政府主導による近代化政策のことと解釈する<sup>127</sup>。つまり、「上からの」政治の近代化は公定ナショナリズムによる近代化と同意である。結果、近代化後発国であるタイでは、国家間の影響によっても公定ナショナリズムの発動が必要であったと類推される。よって、国家間の観点においても、ラーマ6世治世期の分析が重要であると言える。

最後に植民地と非植民地の相違について整理する。アジアの国々は基本的に近代化後発国であり、タイや日本の非植民地国家とそれ以外の植民地国家とに分類される。アンダーソンは「公定ナショナリズムは、非ヨーロッパの文化と歴史に入り込んで屈折し、直接支配を免れた（日本、シヤムその他の）ごく一部の地域で、土着の支配集団によって採用され模倣された。」<sup>128</sup>としている。これにより、非ヨーロッパであるアジアでは、公定ナショナリズムは非植民地において採用されたと推察する。反対に、植民地の近代化は支配者である宗主国によると類推される。よって、植民地と非植民地の近代化には差異があると考えられる。他方、前述の通り、シヤム王国の主たるモデルは植民地官僚国家であり、類似点が多くあると想定さ

れる。ついで、タイを対象とすることは、植民地および非植民地それぞれの近代化と都市空間との関係性を明らかにする一助になる。

以上を踏まえ、本研究では、非植民地近代化後発国の近代化の分析に有効と考えられる国・時期として、タイの公定ナショナリズム発動期であるラーマ6世治世期に着目し、近代化、特にナショナリズムと空間との関連性を、同治世期の複数の事業にみられる国家内の関係性と、国家間の関係性の2つの視点から捉えることで、都市空間が社会構造変革にもたらす働き的一端を明らかにする。

## 1. 2 研究対象の設定と研究の方法

近代化と空間との関係性に着目する本研究の対象抽出に際し、近代に関連する空間や制度を、社会へ導入する前に、実施および試行する取り組みを「近代化実験」、ならびに同取り組みを行う空間を「近代化実験空間」と定義する。同空間は、国家や都市あるいは住民等が既存社会から近代社会へと近代化を行う過程において主に生じる実験空間であると捉える。その上で、近代化が同実験空間の達成目標であると見なすこととする。この近代化実験空間のうち、本論文では、ラーマ6世治世期（在位1910-1925年）に実施された、近代化実験に関する取り組みが認められる2つの事業を対象とする。1つ目は実空間において近代国家形成に関する実験が行われたミニチュア都市「ドゥシッターニー」（以下、DT）、2つ目は、当時のシヤム王国の近代国家としての姿を国内外にアピールしようとした「シヤム王国博覧会計画」（以下、SKE）である<sup>129</sup>。

分析は、これら2つのプロジェクトの一次資料や古典的資料を用い、アンダーソンの国家内の関係と富永の国家間関係の視点からナショナリズムと空間との関係を包括的に捉える。近代化実験空間と実都市空間との関連性、近代化実験空間の方向性を中心に調査することで、近代化実験が実空間で実施された意味・意義を読み解く。なお、DT及びSKEがバンコクで実施されたこと、当時のタイは中央集権化への移行期で首都であるバンコクで近代化が顕著であったと推察されることから、タイの中でもバンコクを中心に論じる。

本論文では1章で本論文の背景や目的の説明、研究対象の設定、ラーマ6世治世期の概況説明、既往研究の整理を行う。2章でDTを中心とする一連のミニチュア都市、3章でSKEと、それぞれの近代化実験空間の分析を行う。4章はまとめである。

また、研究にあたり、資料は、タイ国立公文書館保管一次資料、タイ国立図書館保管図書、研究論文、図書等を使用する。なお、タイは、1939年6月にシヤムからタイに国名を変更した経緯があることから、それ以前に関してはシヤム、それ以降についてはタイと表記しつつ、引用文献からの表記では原文に準拠することとする。

## 1. 3 ラーマ6世治世期のナショナリズムとバンコクの都市形成

ここでは、ラーマ6世治世期のシヤム王国のナショナリズムとバンコク市街の拡大を、基本的文献を用いて要約する。

シヤム王国では、1855年にイギリスとの修好通商条約であるパウリング条約を締結して以降、急激に国際社会の波に入る<sup>130</sup>。その際、近代化後発国として、政府主導による「上からの」近代化政策の元、西洋化における革新的態度を持ちつつ、タイ独自の伝統文化との融合、タイ洋折衷の近代化をいかに成し遂げていくかを模索したと考えられる<sup>131</sup>。

ラーマ6世治世期は、シヤム王国民としての国民性の鼓舞が随所に意識された<sup>132</sup>。新聞発行が盛んになり、ラーマ6世自ら『タイ』

紙を主宰し<sup>6)</sup>、新聞によるラーマ6世の思想の周知が広く行われた。また、ラーマ6世は1919年の第1次世界大戦で戦勝国となったことを利用し、パウリング条約をはじめとする不平等条約撤廃への働きかけを行い、シヤムの地位向上を図った<sup>22)</sup>。他方、当時のシヤムでは民主化や立憲主義の動きが活発化しだしていた。ラーマ6世の即位前後、1910年6月に中国人商人と労働者がゼネストを行い、中国人移民がシヤムの政治に参加しはじめたこと<sup>23)</sup>をはじめ、1911年に中国において辛亥革命が勃発したこと、1912年3月はじめには辛亥革命を参考にし日本の発展にも影響を受けた青年将校のクーデター計画であるラッタナコーシン暦130年反乱事件が発覚し、100名以上が逮捕され未然に防止されたこと<sup>24)</sup>、シヤムにおいて「中国人」は、王朝原理に対する深刻な脅威、民衆的共和主義の先駆者とみなされるようになったこと<sup>25)</sup>等が生じており、これら理由によりラーマ6世も「公定ナショナリズムのすべての政策手段を行動させた。国家統制下の初等義務教育、国家の組織する宣伝活動、国史の編纂、軍国主義」<sup>26)</sup>等を実行して対抗し、抑えきれなくなった民主化や革命への流れをいかに絶対君主制下で懐柔していくか模索していた。そのような状況の中、1918~1925年にDTが実施され、1926年の開催に向けSKEが計画された。

その後、1925年にラーマ6世が崩御し、ラーマ7世治世期（在位1925-1935）の1932年に立憲革命が行われ、絶対君主制下での近代化は終わりを迎えることとなった。

次にバンコクの近代都市形成と都市拡大について整理する。タイの通史では、王朝は一般的にスコタイ王朝、アユタヤ王朝、トンブリ王朝、そして1782年に開かれたチャクリー王朝（バンコク王朝）の4つとなっている。ラーマ6世の考えはこの「中心都市の歴史観」であり、一方、ラーマ5世は多中心的認識に基づくタイの近代国家観を呼びかけており<sup>9)</sup>、ラーマ5世とラーマ6世で異なる歴史観を持っていた。なお、バンコクの道路、水路、鉄道に関する記録はHafner A. Jamesの論考<sup>9)</sup>に概要がまとめられており、同記載を元に、本節ではそれら史実とバンコクの都市拡大（Fig.1）における空間性との関係を分析する。

バンコクでは、まず1782年にチャクリー王朝が開かれた際、トンブリ朝の時代から存在していた水路の外側にロープクルング水路（パーンランプーとオーンアーンの2本の水路で成り立つ）を開削し、このロープクルング水路をバンコクの境界とした<sup>27)</sup>。これにより島状都市が形成された。

最初の都市拡大は1851年、ラーマ4世の時に実施され、ロープクルング水路の外側に掘られたクルンカセム水路が都市の境界となった<sup>28)</sup>。当時、1855年にイギリスとの間にパウリング条約<sup>29)</sup>（修好通商条約）が締結され、自由貿易の原則、一律3%の関税、外国人の居住ならびに土地購入の条件、領事館の開設等が定められた<sup>10)</sup>が、西洋諸国と同様の条約締結が相次ぎ<sup>30)</sup>、バンコクの都市拡大に国際社会が関わってくるようになった。

次に、バンコクの東部、南部・南東部、北部を見ていく。まずバンコク東部へは、水路の掘削によって都市拡大が始まったと言え、セン・セーブ水路が1837年から1840年にかけて建設された<sup>31)</sup>ことが大きい。また、1856年にパドゥン水路からクロン・トイへ直線的にタノン・トロク水路が作られ、歩道が川の西側に併設された<sup>32)</sup>ことも挙げられる。タノン・トロク水路は、多くの船舶が西洋から

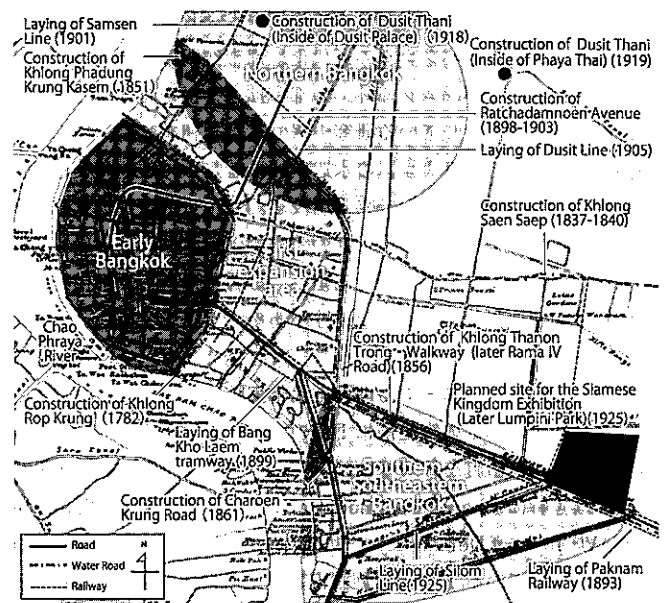


Fig.1 Map on Bangkok

来るようになり、南部の西洋人のコミュニティが拡大していった中、西洋商人が王様ヘクロン・トイの港から中心部へショートカットできるよう嘆願した結果作られた水路であり<sup>33)</sup>、おって作られるルムビニー公園も隣接する同水路を通し、国際社会と都市形成の結びつきを垣間見ることができる。

バンコク南部・南東部では、1861年、チャルン・クルン道路の完成が都市拡大に影響を与えた。同道路は王宮近くからチャオブラヤー川に並行して南下しタノン・トックで終わる道路であり、当時バンコクに居住していた西洋人からの、運動不足解消のために乗馬ができる道路建設をお願いするという嘆願書に基づいて建設された。同道路沿いには、外国領事館や店舗のほかキリスト教関係施設も建てられ、西洋人が多く居住するエリアとして国際的・商業的要素の強い地域が構築されていった。<sup>34)</sup>

最後にバンコク北部への拡大は、1898年から1903年にかけて建設されたラーチャ・ダムヌーン道路の存在が大きい。同道路は王宮前から東へ進んだ後に北へ方向を変えて新宮殿に至る大道路で、パリのシャンゼリゼ道路を模し、国王の権威あるいはシヤム王国を顕示する道路として機能することとなった。また、新宮殿や王族官僚の邸宅、官庁、軍施設、学校、王立競馬場、動物園などが周囲に建設され、国内的、政治的要素が強い地域となった。<sup>35)</sup>

このようにバンコクは水運の要であるチャオブラヤー川から離れる方向へ水路・道路設置によって都市が拡張されつつ、バンコク南部・南東部は西洋商人や外国人を中心とした国際的なエリア、バンコク北部は国内的・政治的なエリアへと色分けられていった。

#### 1. 4 既往研究と本研究の特徴

DT に関しては、Darunarak<sup>11)</sup>が制度や出来事等について写真を交えて記載している他、ラーマ6世の様々な伝記本で取り組みに触れているが、概要の整理にとどまり、詳細な研究や分析が今後の課題である。また、SKEについては、Pavinee<sup>12)</sup>が敷地デザインの変遷を整理している他、Sriudom<sup>13)</sup>がタイの最初の展覧会からSKEまで展覧会の内容と変遷を西洋の影響に着目して考察しており、事業内容が明らかになりつつあるが、近代化との関係性の把握には更な

る研究が必要である。他方、日本での DT や SKE の紹介や研究はこれからである中、バンコクの近代化と都市空間については、トンブリ王朝時代からバンコク郊外への都市拡大までの時代を中心に都の構成要素として論じている研究<sup>14)</sup>や 20 世紀初頭のバンコクの初期都市地域であるプラナコンの水辺空間に着目して空間の変遷を論じた研究<sup>15)</sup>等がある。先行研究と比較し、DT や SKE を近代化実験空間と捉えて、ラーマ 6 世治世期の公的ナショナリズムという政治の近代化の観点を用いつつ、近代化への影響を分析し、都市空間と近代化の関連性を論じる点に新規性がある。

## 2. ドウシットターニーにおける近代化実験

ラーマ 6 世は DT の実施前に DT の内容となつがる取り組みであるマン市、自治市町を行っている。マン市、自治市町および DT については、特に Chamuan Amon Darunarak の『Dusit Thani by Rama VI- Town of Democracy-』<sup>16)</sup>にて概要の把握が可能である。同著に記録されている DT の実施状況に関する情報を用い、DT の実験性や空間性、実施意図を明らかにする。

### 2. 1 マン市における近代化実験

ラーマ 6 世は 1902 年(ラーマ 6 世が 21 歳の頃)にイギリス留学から帰国し、まだ皇太子であった 1903 年にバンコク北部の国内的・政治的エリアに立地するアンパワー宮殿にてミニチュア市「マン市」を作成した。同空間は、人形の町のような小さなスケールであり、研究目的で計画的に順序立てて作られた他、コンクリートとセメントで作った川があり、道路、路面電車、住宅、公園や芝生が設置された。ただ、1904 年にラーマ 6 世が出家した際に中止となった。<sup>17)</sup>

### 2. 2 自治市町における近代化実験

次に 1907 年、ラーマ 5 世の 2 度目の欧州外遊時、当時皇太子のラーマ 6 世は代わりに国を管理し都心から出られないことになったため、ドウシットエリアに位置するチットラダーラホーターン宮殿(パールサカワン宮殿)で再度近代化実験空間「自治市町」を行った。

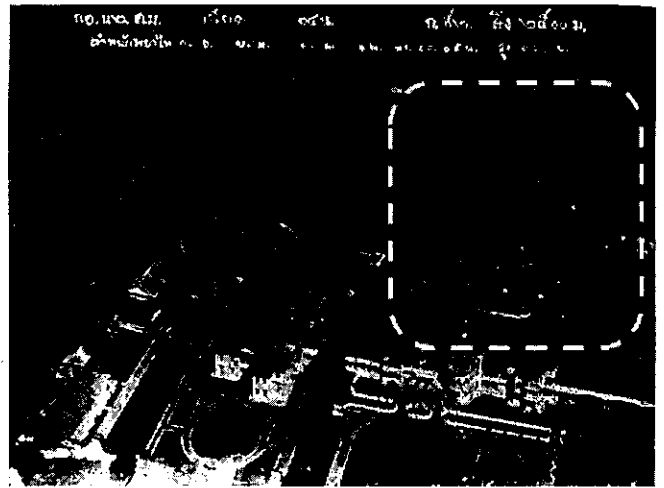


Photo 1 Aerial photo of Dusit Thani (top right white dot line) (Phaya Thai Place)

宮殿の間の壁に沿って棟割長屋を建て、宮殿に住んでいる若い侍従を 1 部屋に 2 人引っ越しさせて住人と仮定した。宮殿の一角(芝生、プール、丘など)を区と設定し、市長や内国官房、建設管理と清潔管理担当、衛生管理者等を置いたり、経営委員会制度を設置した。また、新聞や銀行、税金、ロータリークラブ等も導入された他、美化コンテスト等も実施された。<sup>18)</sup>

つまり、マン市に続いて実施された自治市町は、マン市がラーマ 6 世自身の研究とミニチュア市の設置にとどまっていたことに対し、宮殿内の実空間を利用し、実際の人間に近代都市に関係する役割を与えていた。このことから自治市町での取組では、近代都市運営実験とトレーニングを実施しつつ、同時代のシャム国民に近代国家・都市の運営・生活能力があるかどうかを図る意図を持っていたと想定できる。

### 2. 3 ドウシットターニーにおける近代化実験

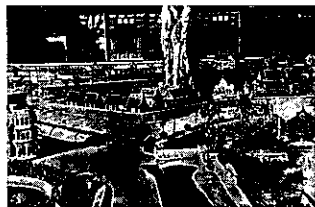


Photo 2 Dusit Thani



Photo 3 Dusit Thani



Photo 4 Dusit Thani

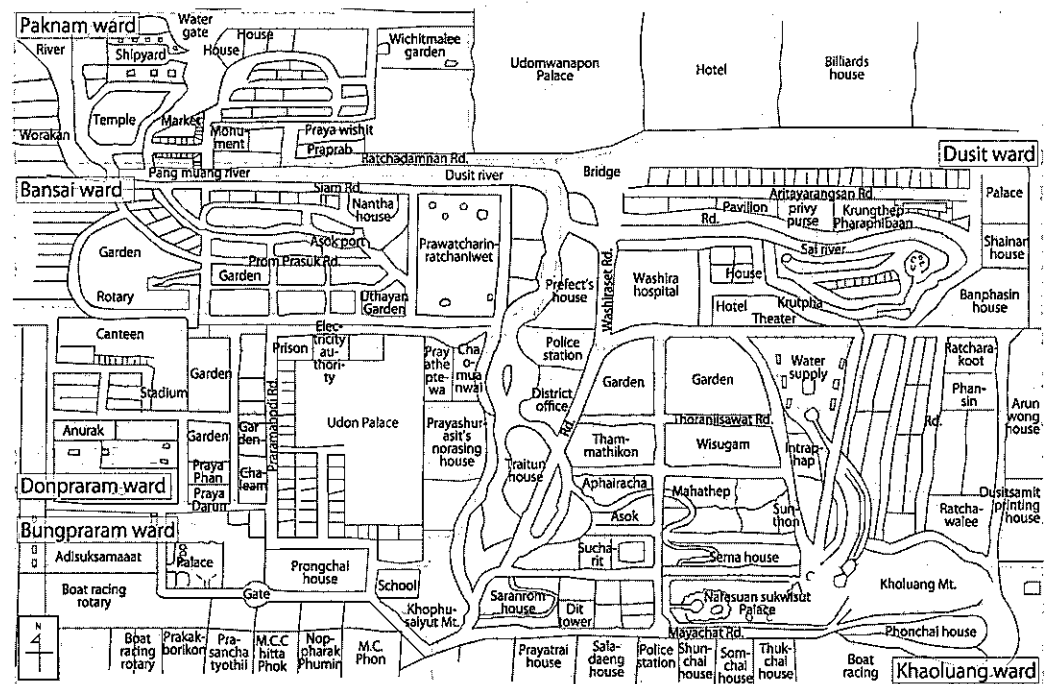


Fig.2 Plan drawing on Dusit Thani (Dusit Palace) (Background gray color stands for the area of each ward)

マン市及び自治市町を経て、DTが1918年7月21日より実施された。DTは、ラーマ6世により設置・運営されたミニチュアの架空都市で、ラーマ6世が崩御する1925年まで実施された。DTもバンコク北部ドゥシットエリアにあるドゥシット宮殿に設置された。その後、1919年にパヤタイ宮殿敷地内に移設されたが（Photo 1）、その際、2倍の3ヘクタールほどの空間に拡張された。DTでは実際の12分の1のスケールの都市が構築され、同じく12分の1スケールの設備や建物が設置された（Photo 2,3,4）。<sup>11)</sup>

Fig.2を観察すると、DTではタイの都市の特徴の一つである張り巡らされた水路網を導入しつつ道路も作られており、かつ、住居や区役所、警察、出版社、ポートルースくじ場、病院等が設置されている。これにより、DTではシャム王国の近代都市をイメージした空間の中で一つの都市・自治体の運営実験を実施しようとしたと考えられる。DTの空間や建物を近代のシャム王国をイメージしつつミニチュアにより全て構築し把握したことは、支配する領域・権力の系譜や正当性を示すことにつながると推察されることから、「人口調査、地図、博物館」のうちの「博物館」と捉えられる。

なお、DTの地名は実際のシャムには存在しない仮想の名前が多いが、一部には既に存在している地名を使用しているケースやDTの地名が実際に都市に付けられるケースもあった。後述するSKEの跡地に作られたルムピニー公園の名がついた区画もDT内にあり、実際のルムピニー公園より6年早く1919年6月24日に設置された<sup>注36)</sup>。

DTでは設置されたミニチュア住居に位の高くない一般の公務員やラーマ6世等が住民として入居している<sup>12)</sup>設定がとられ、同住民による近代制度に基づくDTの自治・管理が行われた。まだシャム王国には憲法が未制定の時期であったが、DTの憲法と言える法律<sup>注37)</sup>が作られ、様々な近代制度に関する条項が記載された（Table.1）。同法前文には「自己幸福のためにいくつかの事柄を自治する方法を学ぶためのものである。（中略）この憲法は、ドゥシットターニー市民が、いくつかの問題において自治管理の意見を表明する声と機会

を持つ証拠である。まだ権限を与えられていないその他の事項は、陛下が支配する中央政府に属するものとする。これは他の先進国の統治に似ている。」<sup>13)</sup>と明記されており、近代的な都市運営の実験を同住民によって実施させることを示している。DT憲法は、前文の後、名称と使用法の説明から始まり、自治市町長の任命や選挙制度、地方自治体当局の役割や業務、税制、設置すべき建物や公共施設、都市美観、衛生や病氣予防、評議会、財政、罰則等について明記され、運用された。事例として、選挙でDTの自治市町長を選ぶ際、選ばれた人が辞退を申し出ようとしたことに対するラーマ6世(DT内ではラーマ ナ クルンテープ名)の発言を引用すると「ラーマ ナ クルンテープ殿は、すぐ立ち上がり、「ドゥシットターニーは実験するために作られたものです。本物を真似して、どんな役に立つか研究するためです。私の目的は、若い人に自治市町長の仕事をしてほしいということです。一方、偉い公務員たちの経験はもう十分あります。今回、私たちがミスター リキットサーンサノーンを選んだ理由は、あなたが優秀で、法律家だからです。まだ若いですが、ドゥシットターニーを運営できると思いますので、今回の結果を変えません」と言った。」<sup>14)</sup>とある。これにより、位の高くない一般の公務員への近代制度による国家・都市運営の訓練と、絶対君主制下での近代化の同公務員への訴求が行われた。かつ、ラーマ6世自身が近代化推進を考えていることを同公務員に伝達している。この様子から、ラーマ6世はDTを通じて、同公務員による国内のクーデターの抑止も狙ったと推察する。また、1918年のDT憲法改正及び1922年の税制に関する法律の追加<sup>15)</sup>にて、土地や電気、水道の税金について具体的に記載された。なお、DT憲法には、DT市民の国勢調査記録を作成し、常に更新する旨、記載されており<sup>16)</sup>、このことは「人口調査、地図、博物館」の「人口調査」に該当すると言える。また、DTは架空ではあるもののシャム王国の都市をイメージして作られた都市であり、Fig.2のように都市の領域が明示されている他、DT憲法にこの地域を憲法の対象範囲とする旨が明記されている<sup>17)</sup>ことから、シャム王国の近代都市の「人口調査、地図、博物館」の「地図」に該当すると言える。

当時、シャム王国の実際の社会では、1921年にラーマ6世が担っていた首相職を別の人に就任させようとした事例<sup>注38)</sup>、1921年に地方自治体の一つであるサムットサーコーン県にて近代制度を導入しようとした事例<sup>18)</sup>、1922年にバンコクに市制を布くことを検討した事例<sup>注39)</sup>がそれぞれラーマ6世によって行われ、DTで実施していた近代制度を実際の社会でも導入しようと検討した。なお、これら事例はその時は実現しなかった。

DTでは、DTに関する新聞の発行や見学ツアーも行われ、特に新聞は3誌作られ、DT外でも一般に販売された<sup>19)</sup>。また、DTの新聞に実際の社会の情報が、実際の社会の新聞にDTの記事が掲載されることもあった<sup>20)</sup>。これら新聞による国民に対するDTの情報伝達を通して、国民の一般入手情報の中に近代制度に基づく国家・都市運営の情報が徐々に入り込み、近代制度の訴求が行われ、近代国家・都市への理解や順応の促進が期待されたと考えられる。

## 2. 4 まとめ

マン市と自治市町の経験を踏まえ、DTでは、近代国家・近代都市像を連想させるミニチュア空間で、近代制度による自治が実験された。参加者であるDT住民及び国民に対し近代都市・自治体運営能

Table 1 Modern systems which were conducted in Dusit Thani

Categories	Contents
City mayoral election	<ul style="list-style-type: none"> <li>One-year term, reappoint for the following year was not allowed.</li> <li>Householders had right to vote.</li> <li>The candidate who got vote the most became mayor after the king gave permission.</li> <li>Person who did not want to become mayor had right to refuse, needed to pay fine of 50 bahts or exception was allowed.</li> </ul>
Taxation system	<ul style="list-style-type: none"> <li>Set tax for land, electricity and water in Dusit Thani.</li> <li>Carrying out of census was written down.</li> </ul>
Offer and management of infrastructure and communal facilities	<ul style="list-style-type: none"> <li>Government had responsibility for following things,               <ol style="list-style-type: none"> <li>To maintain and protect happiness of citizens and prevent unhappiness.</li> <li>To maintain roads, rivers and canals and offer electricity and water.</li> <li>To establish fire house and park for citizens' profit and happiness.</li> <li>To manage hospital, mortuary and slaughterhouse.</li> <li>To offer education, library and school.</li> </ol> </li> </ul>
Right of taxation	<ul style="list-style-type: none"> <li>Mayor had right to impose taxes on market, house, mercantile store and floating house.</li> <li>Mayor called for citizen meeting to get agree about tax rate</li> <li>Mayor needed to announce and call meeting when he changed tax rate.</li> </ul>
Business permit of commercial facilities	<ul style="list-style-type: none"> <li>Mayor could give permission for setting up bank, hock shop, market, railway and ferry boat.</li> <li>These permissions were given to reduce citizens' tax burden.</li> </ul>
Building permission	<ul style="list-style-type: none"> <li>Mayor decided layout of the city on his own responsibility.</li> <li>Permission by engineer was required when new building was being constructed.</li> <li>City council appointed health officer to maintain purity of the city and prevent littering.</li> <li>Mayor had right to order renovation of house if it might destroy or damage among the neighbor.</li> </ul>

方の育成だけでなく近代国家・近代都市のイメージを伝える取り組みが行われた。また、DT 実施中、DT で実験されていた近代制度の類似制度を実際のシャム王国の社会に導入しようとしていたことから、DT を通してシャム王国に適した近代化の形式が模索され、西洋化の過程でタイ洋折衷の近代化を意識したと言える。ラーマ 6 世は、実験対象の位の不高くない公務員に対し、近代制度による国家・都市運営を訓練させつつ、他方、国内のクーデターの抑え込みのため、公務員や国民に国王自ら近代化へ取り組む姿勢を示した。その際、DT の情報が新聞等を通して実際の社会と同じように大衆に伝わることにより、国家や都市の近代化への理解や把握を容易にさせたと考えられる。また、シャム王国の都市をイメージした架空都市の建設、ミニチュアの施設・建築の設置、DT の国勢調査等を通して、理想とする近代国家・都市像に関する「人口調査、地図、博物館」が可視化されようとしていた。このことは、DT の支配者であるラーマ 6 世が近代化したシャム王国の支配者となる正当性を持つことと読み替え可能である。結果、DT は、シャム王国の現状から理想とする近代化像へ如何につなげるかを模索した空間であった。

### 3. シャム王国博覧会計画とシャム王国・バンコクの近代化

#### 3. 1 シャム王国博覧会計画概要

SKE はラーマ 6 世即位 15 周年を記念してラーマ 6 世自らによって計画されたシャム王国に関する博覧会計画であり、敷地は南部・南東部の国際的なエリアかつ当時の都心の端で周囲を田畑に囲まれたサラデーエンにあるラーマ 6 世の土地を下賜した場所で検討された。敷地造成や準備は進んでいたが、1925 年にラーマ 6 世が崩御したことにより実施されず、その後ルムピニー公園として整備された。

#### 3. 2 シャム王国博覧会計画の実施意図・背景

ラーマ 6 世は、当時の不況の解決のため、フランスやイギリス、アメリカでの博覧会の例を活用し、大規模な博覧会を計画した。博覧会により、建設労働者や鍛冶屋、芸術家等は仕事が出来、裕福な人はきれいな服を来て出かけ、様々なことが動き始めると、商売に

もつながり、少しずつ商売が多くなると、不況を解決できると考えた。<sup>10)</sup>

また、「シャム人が自国をより知り、資源を工夫して自分の職業に活かし、外国人がシャム王国の資源を知るようになり投資につなげるため、シャム王国の作品をはじめ、資源、人口、名物などの展示会」<sup>12)</sup>であると考えられた。このことより、自国民のシャム王国に対する意識向上が図られ、シャム王国という国家の重要性の訴求が期待されたと推察される。DT と同様、シャム国民に対する絶対君主制下による近代国家化や国家発展の訴求は必須であった。なお、不況のあおりを受け、SKE の経費に国家財政を多く支出することは避け、ラーマ 6 世自身の土地の下賜だけでなく、宝くじの発行による収益充当<sup>13)</sup>、企業や外国人等からの寄付<sup>14)</sup>に頼ることで経費削減を図った。

#### 3. 3 バンコクにおけるシャム王国博覧会計画敷地の立地特性

SKE 計画地(Fig.1)は、現在のラーマ 4 世通りとラチャダムリ通りに面しつつ、南西方向から伸びるシーロム通りがぶつかる区画にあり、都心からあまり遠くなく、ある程度交通基盤も整っており、その後の発展が見込まれる立地であった<sup>16)</sup>。SKE に応じて、1925 年に外国人居住エリアであるバーンラックのチャルアングルン通りから SKE の横を通してプラトゥーンナムサラプラトゥムまで路面電車のシーロム線が敷設され<sup>16)</sup>、SKE 付近が複数の鉄道・交通の交わる地点に変化した。かつ、バンコクの南部・南東部という国際的なエリアの外国人居住地域に隣接し、外国人居住地域の中心に位置するシーロム通りの軸線を SKE 内へ引いている他、外国人の宿を敷地付近へ建設した<sup>18)</sup>ことから、同地域や外国人との関係性も意識したと伺える。

#### 3. 4 シャム王国博覧会計画の平面構成

SKE の平面 (Fig.3) は、シーロム通りの軸線上に作られた敷地中央の通りを境に 2 分され、南東エリアに中央官庁等の展示会場や地方 18 県の展示会場、商店等が並び、北西エリアに王室関連の展示スペースや劇場、運動場等が並ぶ計画であり、近代国家の統治や制

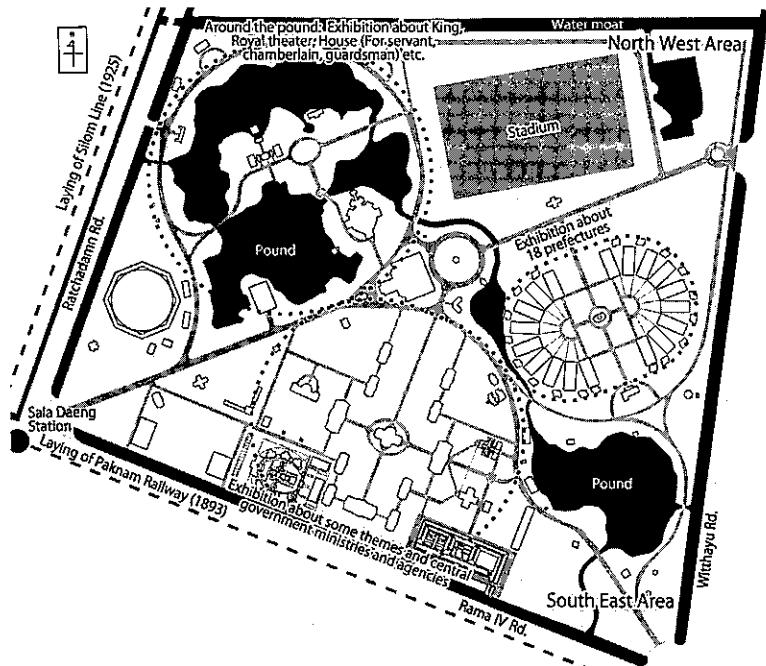


Fig.3 Plan drawing on the Siamese Kingdom Exhibition

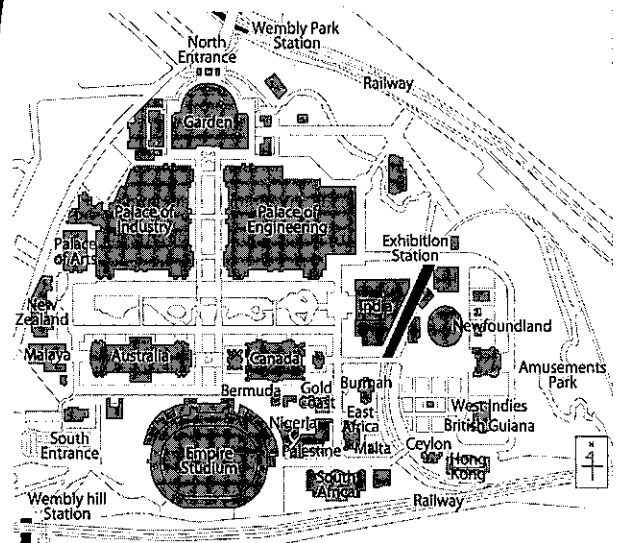


Fig.4 Map of British Empire Exhibition

Table 2 Display plan on the Siamese Kingdom Exhibition

Area	Categories	Contents	
Exhibitions	Government Ministries	King	Display of King related goods and to place rest station for the King
		Foreign ministry	Diplomacy
		Interior ministry	Domestic affairs, prefecture and city police, public health, management of drug excluding marijuana
		Finance ministry	Finance, currency, management of marijuana, treasure and alcohol
		Commercial ministry	Consumer cooperative, botanical garden, commercial registration, commercial related matters, to utilize chemistry to commerce and governance
		Defense department	Army
		Navy department	Navy
		Justice ministry	Justice, retribution
		Transportation ministry	Transportation, train, postal mail, telephone, ferry, car and so on
		Agriculture ministry	Fishery, forestry, agriculture including irrigation, livestock, mineral, measurement
		Education ministry	Education
		National library, Royal secretariat	Library and protection of antique art
		Non-government	Ethology
	Fine arts · Artifact		Art museum, to display pictures, drawings, carvings, art-crafts and so on
	Manufacturing · Industry		Industrial art gallery, to display other than the aforementioned artifact
	Gardening · Arboriculture		Hall for gardening and arboriculture
	Zoology		Hall for animals, to display living animals and photos of them
Authorized	Sports, Amusement, Entertainment	Recreation center and park	
	Authorized cafeteria	Cafeteria inside of the exhibition was subject to fees	
Non-governmental shops	Authorized area for goods which are not for contest		

度に関連する施設は南東エリアに集中した。Fig.3を観察すると、中央官庁等の展示会場として12棟の建物が左右対称の平面構成で配置され、中心に美術館、左右に工業館と農業館が置かれ、また、周りを囲むように法務省、外務省、王財産省、国防省、商務省、農業省、教育省、内務省、財務省等中央省庁の施設が計画されている。また、地方自治体18県の展示会場として、角丸長方形の形をした幾何学的な平面に各県の展示館が均等に配置される計画であったことも見て取れる。これら中央官庁等と地方自治体の展示会場は対称性や幾何学性を意識しつつ、エリア内の異なる場所に配置されているが、他方、王室関連の展示を中心とする北西エリアは池の周りに施設が配置され、幾何学的な構成要素が少ない。SKEについては「ラーマ6世は、治世が1925年11月に15周年迎えることを記念して、イギリスのウェンブリー展覧会をモデルにした国際展覧会を開催することを心に決めた。」<sup>19)</sup>との記述がある。ウェンブリー展覧会つまり大英帝国博覧会平面図(Fig.4)と比較すると、対照的で幾何学的な平面構成、テーマ別展示館や競技場の設置、鉄道の敷設等類似点が観察される。これより、平面構成においては大英帝国博覧会の影響を受けていることが伺える。なお、ラーマ6世自身イギリスへの留学経験があり、西欧文学の翻訳<sup>20)</sup>をはじめとする西欧を意識した活動があり、SKEもイギリス留学との関連性を想起させる。また、1900年のパリ万博で言及された「1900年のクルー(呼び物)につ

Table 3 Exhibition plan of Ministry of Education on the Siamese Kingdom Exhibition

No.	Detail
1	Exhibition of educational plan and statics about language, photo, map, chart, and speech etc.
2	Exhibition of equipment and textbooks and showing how to use them with photos, real things and models
3	Exhibition of the curriculum and results with certificates and other documents
4	Presenting school type and model of educational facility
5	Exhibition of the way of school's public health management
6	Exhibition of Physical Education with statistics and demonstration
7	Performing music, singing and play
8	Exhibition of student's portfolio and elementary classes
9	Exhibition of seven men's and women's high school booths with students' portfolio
10	Exhibition of optional classes (1) Exhibition of agriculture and providing meals which used products by girls' students (2) Exhibition of technology / craft (3) Commercial by commercial schools (4) Male elementary school teachers demonstrate boys' class (5) Women's elementary school teachers demonstrate girls' classes (6) Nursery school and kindergarten
11	Exhibition of activities of Chulalongkorn University by departments (1) Department of Medicine: exhibition of model of the Siriraj hospital, instrument, speech, meditation, surgery, delivery, pathology, anatomy and demonstration of pharmacy (2) Department of Fine Arts and Sciences: demonstration of educational equipment and chemistry, biology, physics and pharmacology (3) Department of Political Science: statistics (4) Department of Engineering: paint by mechanics, electricity, equipment

いては、ピカールは、シャンゼリゼからまっすぐアンヴァリッドへ突き抜けるヴィスタが1900年のクルーだと述べたとのこと<sup>20)</sup>を踏まえ、SKEで敷地内にシーロム通りから伸びる軸線を引いたヴィスタを用いたことにより1900年のパリ万国博覧会の空間的な特徴が一致すると言える。よって、南東エリアはこれら西洋の博覧会の影響を受けた平面構成計画であった。

また、SKEの敷地には「北部、中央部、南部、東部など各地方の環境のように真似しようとし、各地方の知事から地方植物が送られ公園内に植えた。各地方の資源をそのまま持ってきて公園に集める」と計画された。また、「どの町のものでもこの展示会に集める。特に中央部は、国の貿易の中心である首都のため、エリアを特別に広く分ける。会場の管理の方は、今までの進化が分かるように、タイの歴史、地形、時代別の発展と生活、天然資源などのモデルを展示し、本物とそっくりモデルを作れるものであれば作る。(中略)つまり、ラーマ6世の意向の通りに全てできれば、当時のタイの生活やノウハウが集まる教育センターになるのである。」<sup>16)</sup>とされた。これらより、当時のシャム王国の全体像をSKEの敷地で表そうとした。

つまりSKEの平面構成では、西洋の影響を受けたレイアウト、中央官庁や地方自治体といった近代制度に基づく配置、シャム王国の全体像を示す各地域の特徴を集約した展示によって、シャム王国の近代国家の全体像が表現されようとしたとみなしえる。

なお、国境という概念にしたがって区切られたシャム王国の領域や領域内の情報をまとめて展示する計画であったことから、「人口調査、地図、博物館」の「地図」に該当すると言える。

### 3. 5 シャム王国博覧会計画の展示構成と教育省の展示計画

展示計画は海外の博覧会の展示構成を参照しつつ3案検討されたが、最終的に1924年に実施された大英帝国博覧会の展示方法を取り入れ、分類ごとに展示を分けつつ状況によって展示方法を組み替える方法をとった<sup>21)</sup>。主な展示についてTable.2に記載する。そのうち、Ethologyでの展示は、シャム王国は様々な地域のローカルタイから構成されるため、シャム王国全体の話も展示すべきで、家を



展示して実際のタイの生活スタイルを展示するのは良い方法であること、もし無理であれば、実際の地域の写真を展示し、肖像や写真、服や武器や住宅建材などを展示すべきである<sup>21)</sup>としている。

また、教育省の展示(Table.3)では、教育省の業務や管轄現場の教育の状況を紹介する展示を計画し、シャムの実際の最先端の教育事情を展示しようとした。その際、学習希望者が良い選択ができるよう、様々な場所や方法のプロジェクトや統計、教育のサンプルを置くような展示を計画しており、小学校から大学に至る教育制度の紹介や学生の成績・作品の展示等が計画されていた<sup>22)</sup>。この学生の成績や作品に関し、タイ全土の学生の学習・成績状況が把握できるよう資料の入手を各地へ打診していた<sup>21)</sup>。タイ全土の学生全員を必ずどこかの範疇に分類することにつながる本調査は、学生に関する「人口調査、地図、博物館」の「人口調査」に該当する全国調査も兼ねていたと捉えられる。

他方、タイ全土での教育近代化の成果として、各地の優秀な学生の成績や作品を展示予定であった。教育省からアユタヤ県に対しての指示では「学生が記入した1-3の回答用紙(4の最終試験の回答用紙ではなく)。もし学生が間違えていた場合は、修正させ、教師に質問を修正させ、学生に再回答させてください。こういったことを行う理由は、我々を持ち上げるためではなく、学生の水準に合わせるためである。学生が小学3年生の場合、修正させずに知識を小学3年以上のものに誇張させてください。4の最終試験に関しては、回答の正確性に関わらず、採点し修正なしで提出ください。」<sup>23)</sup>とある。実際の生徒の解答に対し正答に修正させることを希望していると推測でき、理想の教育水準に達していることを示そうとした。また、「古い学校や教室、学生に活動の様子が分かる写真も送ってください。学生が床に座って勉強していたころの古いものがあれば、なお良いです。」<sup>24)</sup>と記載された記録から、過去に比べて教育環境が改善され近代化が進んだことを表そうとしたと推察できる。これらにより国内外に対しシャム王国では近代教育が進み近代国家として成立していることを意図的に示す狙いがあったと言える。

### 3. 6 シャム王国博覧会計画に関連する伝記本の作成

ラーマ6世崩御により実施されなかったSKEだが、配布を予定していたシャム王国の伝記を記載した記念冊子<sup>25)</sup>は最終的に作成された。タイ語と英語が併記された同伝記本は、ルムピニー公園の名称の意味や由来の説明から始まり、シャム王国の歴史をラーマ6世が示した中心都市的歴史観に従いスコタイ、アユタヤ、バンコクと紐解いた後、国王に関する記載、特にラーマ6世の記載に多くのページを割いている。記念冊子の意義・効果として、タイ語と英語の併記によって国内外に同書の内容つまり中心都市的歴史観を訴求しようとしたこと、中心都市的歴史観の記載によって国家と中心都市との強い関係性を国民に意識づけようとしたこと、国王やラーマ6世に関する多くの記載によって君主である国王の重要性を植え付けようとしたこと、シャム王国の歴史に続く形で掲載した国王に関する記載によってシャム王国と国王との強い結びつきを印象付けようとしたことが推察される。

また、同冊子は支配する領域・権力の系譜や正当性を示していることと推察できることから、前述の歴史や地方の展示と合わせて「人口調査、地図、博物館」のうちの「博物館」と捉えられる。

### 3. 7 博覧会計画の中止

1925年11月25日、ラーマ6世が崩御すると、計画中であったSKEの実施の可否に関するやりとりがわずか3日後から始まっており<sup>17)</sup>、緊急性の高い議題であったことが伺える。やりとりでは、事業実施の意味・意義の追及よりも国家財政への負担問題が重要視され、最終的に12月28日に中止が通知された<sup>17)</sup>。一方、ラーマ6世崩御後すぐ、「ラーマ6世の意向は、展示会の後、会場を都市の植物園にし、国の財産になるように永続的に維持し続けることである」<sup>26)</sup>と強調されており、結果SKE敷地はルムピニー公園として市民の利益に貢献するために整備すると言及され<sup>17)</sup>、公園としての整備へ向けた手続きが進むこととなった。

### 3. 8 シャム王国博覧会計画のルムピニー公園への影響

SKEの敷地にはその後予定通りルムピニー公園が設置された。同公園は、タイ初の近代的な公共公園として、ラーマ6世の方針(公園化)を常に意識しつつ活用方法が検討されたが、財政難の影響を強く受けた利用を繰返し、1929年から1934年に実施された土地貸与による遊園地化<sup>18)</sup>の後、継続的な植物園計画の模索<sup>23)</sup>、1934年から1941年にかけての都市公園化<sup>24)</sup>、1938年の国からバンコク都への管理権限の移譲<sup>25)</sup>、1941年から1945年の日本軍の駐屯<sup>26)</sup>と、短期間で用途や環境の変化が相次いだ。1938年の管理権限移譲の際には、プラナコン県とトンブリ県及びバンコク都より、スポーツや運動のスペースを持った市民に使いやすい都市公園としての活用のために国からの移譲が希望された<sup>25)</sup>という事実があり、その理由として、立憲革命及びバンコク都管理開始後、都市環境変化に伴って誕生した市民との関係を意識した検討がなされた、という推察が成り立つ。結果、SKEの当初の意図である支配者主導による公定ナショナリズムのための空間から市民の要望を中心に据える空間へと変化することとなり、空間の目的が政治の近代化である近代国民国家形成ではなくなった。結果、同敷地の近代化実験空間としての役割は終わりを迎えた。

なお、前述のバンコク都によるラーマ6世の考えを意識した記載<sup>25)</sup>や1933年の都市公園化検討時に運動場の建設が相談された際の「委員会は、適切ではないと考えている。理由は、国民のための公園にするというラーマ6世の意向に反するためである。また、委員会は、バンコク都には他の町のように国民がリラックスできる公園が一つもなかったため、ルムピニー公園こそ唯一の公園であると考えている。さらに、ラーマ6世もそのようなことをおっしゃって、国民のための公園に土地を譲った。」<sup>23)</sup>との記載のように、ルムピニー公園の議論の際、崩御後であったとしても常にラーマ6世の意思が場所の目的として尊重され、ルムピニー公園の目的・思想を長期的に保つ要因となった。

### 3. 9 まとめ

SKEは当時のシャム王国の近代国家としての姿を、空間を通して示し、シャム王国が近代国家であることを国内外へ明示しようとした空間であった。その際、理想とする近代化の水準に到達している証拠を示すことで、シャム王国が、理想とする近代国家像となっていることを見せようと計画した。また、平面構成や展示、計画を通じた全国の状況調査、伝記本等を通し、理想とする近代国家像の「人口調査、地図、博物館」が可視化されようとしていた。したがって、DT同様、SKEの支配者であるラーマ6世が近代化したシャム王国の支配者となる正当性を持つことと読み替えられる。これらより、



SKE は、シャム王国が支配者であるラーマ 6 世の統治によって近代化された近代国家であるということを明示する意図があったと推察される事業であった。

#### 4. まとめ

DT と SKE の分析を通し、シャム王国のラーマ 6 世治世期の近代化実験空間について次の特徴を明らかにした。

(1) DT は現状からシャム王国の理想とする政治・社会の近代化像へ如何につながるかを模索し、SKE は近代化途中であるシャム王国の実際の社会を、理想とする近代国家像として見せようとした近代化実験空間であった。これら実際の社会と理想とする近代国家像の関係性において、実際の空間を使うことで、実際の社会との親和性や同質性を担保することが可能となり、フィクションでありながら実際の社会の存在と見せかけた。その際、新聞等がフィクション性の低減において効果的に用いられた。結果、これら近代化実験空間は、シャム王国の理想とする近代国家像を明示する空間であった。

(2) DT や SKE の意図の一つとして、国内（クーデターの阻止）への近代国家像の訴求があった。かつ、SKE では、国外（植民地化の阻止）への近代国家像の訴求も意図された。これら近代化実験空間は、シャム王国が絶対君主制および非植民地のまま、近代国家化が可能であることを見せようとした。つまり、近代化実験空間は、理想とする近代国家像に対抗する動きの阻止を期待された空間であった。

(3) DT と SKE という理想とする近代国家像を示した近代化実験空間には、同国家像にかかる「人口調査・地図・博物館」の概念の適応が見受けられた。このことは、両空間及び既存社会の支配者であるラーマ 6 世が理想とする近代国家を正しく統治できるということを国内外に対して可視化して見せようとしたと言える。よって、ナショナリズムを形成する過程において、近代化実験空間は、近代化後発国の既存社会の支配者が、近代国家化された後も支配者であり続けるという政治状況の正当性を示そうとした空間であった。

なお、近代化実験空間においては、バンコクの一部で実施および計画したことで実際の社会に影響を与えようとしたが、それによるバンコク独自の文化の醸成や現代の都市空間への影響、他の近代化後発国である日本及び植民地諸国との比較、近代化以外の社会構造変革に関わる実験空間の調査についても、今後の課題として、詳しく分析を続ける必要がある。

#### 参考文献

- 1) Tominaga, K.: Kindaika no riron (Theory of Modernisation), Kodansha International Ltd., 1996 (in Japanese)  
富永健一：近代化の理論，講談社，1996
- 2) Anderson, B.: Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, Shiraiishi, T. and Shiraiishi, S. (trans.), Shosekikobo Hayama Publishing Co., Ltd., 2016 (in Japanese)  
ベネディクトアンダーソン著，白石隆，白石さや訳：定本想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行，書籍工房早川，2016
- 3) The Japanese Society of Thai Studies (ed.): Tai jiten (Encyclopedia of Thailand), Mekong Publishing, co., Ltd., pp.402-403, 2009 (in Japanese)  
日本タイ学会編：タイ事典，めこん，pp.402-403，2009
- 4) Kakizaki, I.: Toshi kotsu no poritikusu - bankoku senhappyakuhachijuroku nisenjuninen (Politics of Urban Transport - Bangkok 1886-2012), Kyoto University Press, pp.72-124, 2014 (in Japanese)

- 柿崎一郎：都市交通のポリティクス—バンコク 1886~2012 年，京都大学学術出版会，pp.72-124，2014
- 5) Kakizaki, I.: Monogatari tai no rekishi (Story History of Thailand), Chuokoronshinsha, 2016 (in Japanese)  
柿崎一郎：物語タイの歴史，中央公論新社，2016
  - 6) Kasetsiri, C. et al: Tai no rekishi -tai koko shakaika kyokasho (History of Thailand -Social studies textbook of high school in Thailand), Kakizaki, C. (trans.), Akashishoten, p.69, 2002 (in Japanese)  
チャンウィットカセートシリほか 6 名著，柿崎千代訳：タイの歴史—タイ高校社会科教科書，明石書店，p.69，2002
  - 7) Murashima, E.: Pibun -dokuritsu tai okoku no rikken kakumei (Political Life of Pibun -History of Constitutional Revolution in the Independent Siam), Iwanami Shoten Publishers, 1996 (in Japanese)  
村嶋英治：ピブーン—独立タイ王国の立憲革命，岩波書店，1996
  - 8) Winichakul, T.: Siam Mapped -A History of the Geo-body of a Nation, Ishii, Y. (trans.), Akashishoten, pp.296-299, 2003 (in Japanese)  
トンチャイウィニツチャクン著，石井米雄訳：地図がつくったタイ—国民国家誕生の歴史，明石書店，pp.296-299，2003
  - 9) James, H. A.: Southeast Asian Development Series Number 1 Thailand Transportation Development Project, The Department of Geography and The Center for South and Southeast Asian Studies University of Michigan Ann Arbor, Michigan, 1977
  - 10) Sekai dai hyakka jiten dai ni han (World encyclopedia second edition), Heibon-sha, 1998 (in Japanese)  
世界大百科事典 第 2 版，平凡社，1998
  - 11) Darunarak, C. A.: Dusit Thani by Rama VI - Town of Democracy, 1970 (in Thai)  
Chamuan Amon Darunarak: Dusit Thani Muang Prachathippatai Prabatsomdet pramonkutklaochaoyuhua, 1970
  - 12) Pavinee, I.: Master Plan Design for Lumpini Park: Concept and Transformation 1925-2014, Academic Journal of Architecture Vol.63, Chulalongkorn University, 2014 (in Thai)  
Inchompoo Pavinee: suan lumpini neowkhid le kanpleanplangchangmeabot tangtea phutthasakkarat 2468 thung 2557, waarasatwichakan sathapattayakrammasat chababthii 63, chulalongkorn mahawithayalai khanaaksornsat, 2014
  - 13) Sriudom, K.: From "National Exhibition" to "The Siamese Kingdom Exhibition": reflections of Siamese history in the reigns of King Chulalongkorn and King Vajiravudh, Chulalongkorn University (Department of History, Faculty of Arts), 2006, Ph.D. thesis (in Thai)  
Kanthika Sriudom: Chak "nashennel exhibishan" thung "saim rat phiphitaphan": phapsathon prawatsat saiam nai ratchasamai pharabatsomdetpharachunlachomkloachaoyuhua le pharabatsomdetphramongutkloachaoyuhua, chulalongkorn mahawithayalai khanaaksornsat (sammakngan wannakram le prawattisat), 2006, withayaniphon dussadiibandit
  - 14) Tomosugi, T. (ed.): Ajia toshi no shoso -Hikaku toshiron ni mukete- (Aspects of Asian City -for Comparative City-), Dobunkan Publishing Co., Ltd., 1999 (in Japanese)  
友杉孝編：アジア都市の諸相—比較都市論にむけて—，同文館出版，1999
  - 15) Iwaki, Y. and Thaitakoo, D.: Diversity of Waterside Space in Phra Nakhon as Walled District of Bangkok in Early Twenty Centuries, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 77, No. 671, pp.199-205, 2012. 1  
岩城考信，ダナイターイタク：20 世紀初頭のバンコク都城域・プラナコンにおける水辺空間の多様性，日本建築学会計画系論文集，第 77 巻，第 671 号，pp.199-205，2012. 1
  - 16) Darunarak, C. A.: Official Affairs of Rama VI, Teachers council commercial education center, 1969 (in Thai)  
Chamuan Amon Darunarak: Phraratchakaraniyakit samkhan nai Phrabat Somdet Phra Mongkutklao Chaoyuhua, Ong Kankha Khong Kuru Sapha, 1969
  - 17) M.16/1. Lumpini park and the Siamese kingdom exhibition, National Archives of Thailand (in Thai)  
M.16/1. Suan Lumpini le gansiamratphiphithaphan, Ho Chodmaiht Heng Chat

- 18) King Rama VI Memorial Foundation: Encyclopedia vol.2 Rama VI, Edison Press, 1981 (in Thai)  
Munlanithi praborommarachanusorn pramonkutklaw chaw yuu hua: Saranukrom Somdet Pramongkutklaohaoyuhua lem 2, Edison Press, 1981
- 19) James, W. A.: Gambling, the State and Society in Thailand, c.1800-1945, Routledge, p.59, 2015
- 20) Unno, H.: Bankoku hakurankai no nijisseiki (Twenties Century as a Century of Exhibitions), Heibonsha, p.26, 2013 (in Japanese)  
海野弘: 万国博覧会の二十世紀, 平凡社, p.26, 2013
- 21) ST.19/3. Play of the Siamese kingdom exhibition (1925/4/17-1925/12/25), National Archives of Thailand (in Thai)  
ST.19/3. Kan sadeng saimratphiphithapan (1925/4/17-1925/12/25), Ho Chodmai Heng Chat
- 22) ST.19/2. Play of the Siamese kingdom exhibition (1924/5/20-1925/5/18), National Archives of Thailand (in Thai)  
ST.19/2. Kan sadeng saimratphiphithapan (1924/5/20-1925/5/18), Ho Chodmai Heng Chat
- 23) SR.OMT.31/2. Regarding to the Construction of Lumpini Park for Citizen [1933-1952], National Archives of Thailand (in Thai)  
SR.OMT.31/2. Kosarang Suan Lumpini Hai Pen Wanasathan Samrab Prashashon [1933-1952], Ho Chodmai Heng Chat
- 24) Bunnak, R.: Memory of the Nation No.2 -Bangkok, Memory of Siam, 2009 (in Thai)  
Rome Bunnak: Banthuk Phandin Ruang Kao Lao Sanuk 2 -Krungrtep, Saiam Banthuk, 2009
- 25) SR.OMT.31/3. Request on Transferring Authority of Lumpini Park from Cabinet Secretariat to Bangkok city, National Archives of Thailand, 1938 (in Thai)  
SR.OMT.31/3. Tessaban Nakhon Krungrtep Kho Rab Oon Suan Lumpini Chak Kra Suang MahadThai, Ho Chodmai Heng Chat, 1938
- 26) Yoshikawa, T.: Domeikoku tai to chuton nihongun -Daitoa sensoki no shirarezaru kokusai kankei (Alliance Partner Thailand and Occupation Forces of Imperial Japanese Army -Hidden International Relations during the Greater East Asia War), Yuzankaku Inc., p.78, pp.149-150, 2010 (in Japanese)  
吉川利治: 同盟国タイと駐屯日本軍 -「大東亜戦争」期の知られざる国際関係-, 雄山閣, p.78, pp.149-150, 2010
- 27) The Siamese Kingdom Exhibition Committee: THE SOUVENIR OF THE SIAMESE KINGDOM EXHIBITION AT LUMBINI PARK B.E. 2468, Chulalongkorn University, 2006

図・表・写真

Fig.1 Royal Thai Survey Department: Maps of Bangkok A.D. 1888・1931 (Third Publication), Royal Thai Survey Department, 1999

の図をもとに筆者加筆

Fig.2 参考文献 11)を参考に筆者作成。なお、本図は他の図と方角を揃えるため意図的に上下を逆にして作成している。また、6つの区域は同文献内の領域設定が曖昧な概略図をもとにしており、境界の位置は必ずしも正確ではない。

Fig.3 Interior Ministry of Thailand: Urban Planning During the Reign of Rama IX, Seven printing group Co.,Ltd., 1999 (in Thai)

Krasuang Mahat Thai: Kan phang muang nai ratchasamai Phabat Somdet prachao yu hua Phummiphon Adunyadet, seven printing group Chamkat, 1999

を参考に筆者作成

Fig.4 Marjorie Grant Cook and Fox Frank: The British Empire Exhibition 1924 Official Guide. London, Fleetway Press Ltd., 1924

を参考に筆者作成

Table.1 参考文献 11)に記載されたDT憲法の内容を参考に筆者作成

Table.2 参考文献 21)を参考に筆者作成

Table.3 参考文献 22)を参考に筆者作成

Photo.1 参考文献 11)に筆者加筆

Photo.2 同上。パヤタイ宮殿時の写真

Photo.3 同上。パヤタイ宮殿時の写真

Photo.4 同上。パヤタイ宮殿時の写真

注

注1) 参考文献 1) p.32

注2) 同上 pp.32-33

注3) 同上 p.50

注4) 参考文献 2) pp.274-275

注5) 同上 p.274

注6) 同上 p.299

注7) 同上 pp.274-301をもとに整理。

注8) 参考文献 2)に基づき、彼とはラーマ5世のことと判断する。

注9) 参考文献 2) pp.163-164

注10) 同上 p.284

注11) 同上 p.286

注12) 同上 pp.164-166

注13) 同上 p.148

注14) 同上 p.165

注15) 参考文献 1) p.362

注16) 「上からの」近代化の解釈は、富永が参考文献 1) pp.363-364で「後発国は定義によって自力による内発的発展ができなかったがゆえに伝搬的発展を必要としている社会なのですから、そのような社会に近代化・産業化を根付かせ得るためには、政府主導による「上からの」適切な近代化・産業化が不可欠です。後発国の社会発展は上からのガイドによるほかはないのです。それには、適切な着眼と能力をもった指導者が中央政府にいないければならず、またその指導者の立案を的確に実現できる行政組織がともなっていなければなりません」と述べていることに拠る。

注17) 参考文献 2) p.175

注18) 本研究の対象選定に関し、参考文献 3)~5)、7)等を参照に、ラーマ6世治世期のシャム王国に設置された近代化に関する空間を挙げると、DTおよびSKE以外に、大学、鉄道、路線バス、道路、水路等がある。近代化実験空間は、近代に関連する空間や制度を、既存社会へ導入する前に、実施および試行する空間であり、既存社会内に設置された大学や鉄道、道路等は近代化実験の要素が少ない。他方、本研究内で言及の通り、DTおよびSKEには近代に関する要素が空間や制度に複数見られることから、近代化実験に関する取り組みの分析を行う本研究の対象として妥当な事業であると判断する。

注19) 参考文献 5) pp.107-109

注20) 参考文献 1) pp.362-366で記載されている後発国の社会発展のための6つの条件のうち、第四の条件「非西洋後発社会の近代化・産業化は、文化伝播をつうじて西洋化を受け入れつつも、固有の文化的伝統のゆえに、西洋とは異なる文化圏を形成することになるでしょう」に基づく。

注21) 参考文献 5) pp.136-137

注22) 同上 pp.138-142

注23) 参考文献 2) p.165

注24) 参考文献 7) pp.19-20

注25) 参考文献 2) p.165

注26) 同上 pp.165-166

注27) 参考文献 9) p.32

注28) 同上 pp.39-40

注29) パウリング条約は、参考文献 10)ではパウリング条約と記載されているが、参考文献 5) p.138にはパウリング条約と記載されており、本研究では表記をパウリング条約に統一する。

注30) 参考文献 5) pp.108-109

注31) 参考文献 9) pp.36-37

注32) 同上 pp.40-41

注33) 同上 pp.40-41

注34) 参考文献 14) pp.25-26

注35) 同上 pp.25-26

注36) DT内のルムピニー公園はその後、別用途へ変更になっている(参考文献 11))。

注37) DTの憲法を、参考文献 7) p.65は「ドゥシットターニー市統治基本法」と呼称している。

注38) 参考文献 7) p.96

注39) 同上 pp.80-81

注40) 参考文献 5) p.134

注41) 記念冊子は、2006年に参考文献 27)として復刻された。

# RESEARCH ON EXPERIMENTAL SPACES FOR THE MODERNISATION OF STATE AND CITY IN BANGKOK, THAILAND

– During the Reign of Rama VI (1910-1925) –

*Yuta GENDA* \*<sup>1</sup> and *Naoto NAKAJIMA* \*<sup>2</sup>

\*<sup>1</sup> Grad. Student, Dept. of Urban Engineering, Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, M.Eng. / The Japan Foundation

\*<sup>2</sup> Assoc. Prof., Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr.Eng.

The objective of this research is to demonstrate the function of the city space based on how it has affected the transformation of social structure in Bangkok, Thailand, by examining modernisation projects conducted during the reign of Rama VI (1910-1925) from the viewpoint of nationalism and by spotlighting domestic and international affairs.

Offering a definition of the spaces that were used for experimenting with the introduction of modernisation as 'experimental spaces for modernisation', two such projects are highlighted in the research. One is a modern miniature city 'Dusit Thani', hereinafter referred to as 'DT', where experimentation was conducted to introduce modern systems. Another is 'The Plan for the Siamese Kingdom Exhibition', hereinafter referred to as 'SKE', which planned on presenting the space from the perspective of the Siam Kingdom.

By analysing these projects, the following three points were clarified.

First, it was revealed that DT worked as a bridge that helped people to connect the current state of the Siam Kingdom with the ideal picture of modernised politics and society, while SKE worked to make people believe that the current state of the Kingdom represented the ideal picture of a modernised country.

These real-world projects made it possible to provide affinity and homogeneity in Thai society and contributed to creating fictitious concepts as reality. These spaces came about because the Siam Kingdom at the time was a non-colonized modernising country. As a result, these experimental spaces for modernisation demonstrated the modern national statue, which was the ideal of the Siam kingdom.

Second, one of the intentions of DT and SKE was to prevent a coup d'état internally, and one of the intentions of SKE was to externally prevent colonisation by presenting a picture of a modernised country. These experimental spaces for modernisation attempted to show that the Siam Kingdom was modernised nationwide as it was an absolute monarchy and a non-colony. In other words, the experimental spaces for modernisation were expected to prevent movement against the ideal modern state image.

Lastly, DT and SKE indicated that the experimental space for modernisation and the adaptation of the concept of 'population survey · map · museum' related to the ideal modern national statue emerged. In other words, Rama VI, the ruler of DT, SKE and the existing society, attempted to make it clear to domestic and foreign parties that he could govern the ideal modern state. Therefore, in the process of forming nationalism, the experimental spaces for modernisation were attempting to demonstrate the legitimacy of the political situation, and the rulers of the existing society of an unmodernised country were appropriate for governing even after modernisation was achieved.

(2019年2月10日原稿受理, 2019年4月17日採用決定)